

# 嗜好思考

Thinking of Diversity

⑤ 包容力のある豊かさを備えた街をつくるために。

小林茂雄 建築環境工学

Photograph: Yamae Suzuki design/Bitter Days

建築というのは、「意匠」「構造」「設備」、この三つからなります。私の専門の環境工学では、空調や照明、音響、給排水といった設備的なものを扱っています。

人が建物の中で快適に、かつ、できるだけエネルギーを使わないで過ごすためには、どのような光環境や温熱環境、音響環境をつくらなければならないのか。そのために設備をどう配置するか、を考えるわけです。

部屋の広さや内装材はいちど決めたら、なかなか変えることができません。一方、光や音といった環境的なものは変えられる。人の行動や心理にあ

わせて、柔軟に操作できる。そこが面白いんです。

二十年くらい前から、「分煙」ということが言われるようになりました。同じ空間に喫煙ゾーンと非喫煙ゾーンがある場合、どこに空調の吹出口と吸込口をもってきて、どのような気流にすれば非喫煙ゾーンへ影響を与えないか。環境工学ではそんな研究も行われていました。

いまは完全分煙になり、

ひとつの空間に喫煙者と非喫煙者が共存するということはなくなりましたが、完全に仕切ってしまうと、視覚的に分断するというのは、逆に心理的な分断を生むのではないかと思います。見えるようにすることで初めて、相手への気遣いや理解が生まれるからです。いろんな空間が見えるということは、自分の楽

しみにもつながります。

たとえば、オープンエアーのカフェでは、街の空気や音を感じ、行き交う人が見えるからこそ、リラックスできるわけです。自習室でも同じです。知らない人が勉強しているのが見えるからこそ、自分のモチベーションをアップすることができ。他の人の存在で、気持ちは安らいだり、高まったりするので。

## ルールは最小限のほうがいい

以前、研究室の学生たちと、グラフィティ、いわゆる街のらくがきの問題と可能性を調査して、本にまとめたことがあります。住宅の壁はもちろん、公共のトンネルや擁壁のらくがきも街の治安を悪くします。それでも、色彩とかテーマに条件をつけることで、許容できるグラフィティもあるのではないかと、本の中で提案しました。

物事にはいい面と悪い面があります。否定的な面だけを見て、禁止してしまうのは簡単ですが、そうではなく、どうい



Shigeo Kobayashi

1968年、神戸生まれ。

東京工業大学工学部建築学科卒業。

同大学院総合理工学研究所社会開発工学専攻修士

課程修了、武蔵工業大学工学部建築学科准教授、

ネヴァダ州立大学ラスヴェガス校客員研究員等を経て、

現在、東京都市大学建築都市デザイン学部建築学科教授。

2010年、日本建築学界賞受賞。

ルールをつくれれば許容できるのか、それを考えることが大切です。

ルールは最小限のほうがいいと思います。他の人に不快な思いをさせてはいけないと自覚していれば、服装や髪型を校則で縛り付ける必要がない

のと同様、そこで暮らす人たちが他の人たちの価値観、多様性を理解できれば、過度な制限をなくしていきけるはず。そして、街は包容力のある豊かさを備えることができるでしょう。

(今回は十一月号に掲載)

この企画の感想をお寄せください。抽選で5名様に文藝春秋オリジナル図書カードをプレゼントいたします。締め切りは9月10日(消印有効)。〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 (株)文藝春秋メディア事業局 「嗜好思考」係宛て



提供 公益財団法人たはこ総合研究センター(TASC)